

# 加曽利貝塚

貝塚とは食糧残滓である貝殻などが捨てられ、地表面に散布され断面に堆積している遺跡です。

日本の縄文時代の貝塚は約 2400 か所といわれます。うち千葉県内には約 700 か所の貝塚があります。また千葉市内には約 120 か所の貝塚があり、全国で最も集中の度合いが高い地域といえます。千葉市の加曽利貝塚は集落を伴う貝塚として国内最大級のものであり、遺物の保存状態も良好で埋蔵されているさまざまな情報量は膨大です。

[資料リスト](#)

## 加曽利貝塚 概要

**位置** 千葉市街を流れる都川を 6 ㌔程遡ると支流の坂月川との合流点があり、そこから坂月川を約 3 ㌔遡上した西側の台地上に位置しています。所在地は千葉市若葉区桜木町で、所在地の旧地名である千葉郡都村加曽利から加曽利貝塚と呼ばれています。国史跡〔北貝塚及び周辺：昭和 46 年指定、南貝塚及び南貝塚東傾斜部：昭和 52 年指定〕であり、特別史跡〔平成 29 年指定〕でもあります。特別史跡の指定基準は「史跡のうち学術上の価値が高く、わが国文化の象徴たるもの」とあります。

**歴史** 加曽利貝塚は縄文時代の貝塚を伴う大規模な集落跡で、縄文人が住み始めたのは約 7000 年前です。約 5000 年前から北貝塚が形成され、その後南貝塚が形成されました。北貝塚は縄文時代中期の貝層が、南貝塚は後期の貝層が発達しています。

**貝塚の大きさ** 北貝塚は直径約 130m のドーナツ状に盛り上がった環状で、南貝塚は 3 つの半月状の貝層が複合して馬蹄形を形作り長径は約 170m です。この 2 つの貝塚は 8 字型に連結するという国内最大級の貝塚です。

**貝塚の中央部** 中央部は南貝塚・北貝塚ともに住居跡や土坑などの遺構は見られず、無遺構の空間です。北貝塚では当初から貝塚を環状にする計画を持ち、貝層を薄く広く積み上げて行ったと思慮されます。住居も貝層範囲とその外側に造られ、貝層範囲からは多くの人骨が発掘されています。後期に南貝塚が形成されても中央部は無遺構のままです。

**住居址** 縄文時代前期 2 軒、中期 73 軒、後期 34 軒、晩期 1 軒の計 110 軒が発見されています。中期の住居址は北貝塚の他に南貝塚や南貝塚の東南方にも散在し、後期の住居址は南貝塚の他、北貝塚や南貝塚の東方にも散在しています。南貝塚の東南方の中期住居址群では、その約半数が覆土に小規模な貝層を伴っています。短期的とはいえ小規模な点在貝塚と大規模な馬蹄形貝塚が一つの集落内に併存したことになり、加曽利貝塚の特異な性格を示唆しています。

## 加曽利貝塚 出土物

貝塚遺跡では酸性の雨水が貝殻の成分であるカルシウムを溶かし、アルカリ性の水になって地中に溶け込んでいきます。貝層上部の貝殻は溶けて行きますが、貝層中の貝殻や骨

はカルシウムの水を浴びて丈夫になり、人骨・獣骨・魚骨などが残るのです。

**編年の標準遺跡** 大正 13 年(1924)の発掘調査では、大正 11 年(1922)の地形測量の際 A～D に区分けされた地点に加え、新たに E 地点を設けて発掘が行われました。その結果 B 地点及び E 地点からそれぞれ新しいタイプの土器が発見され、のち「加曽利 B 式」「加曽利 E 式」と命名されました。この時、市川市堀之内貝塚から出土した「堀之内式」も出土し、B 地点では上層から加曽利 B 式が下層からは堀之内式が出土し、E 地点では上層から堀之内式が下層からは加曽利 E 式が出土しました。したがって加曽利 E 式（中期後半）⇒堀之内式⇒加曽利 B 式（後期中頃）という新旧関係が確認され、縄文土器編年の標準遺跡となりました。

**出土土器** 縄文時代中期頃から、土器は普段用と何らかの儀式用のものに分かれ、後期になると装飾性の高い精製土器と実用性中心の粗製土器に区分できます。特に加曽利 B 式は精製と粗製の差が明確化します。

**「加曽利 E 式」土器** 縄文時代中期後半の土器。E 1 式は円筒形の胴部の上に一回り大きな内彎する口縁部を載せたキャリパ形深鉢土器で、口辺に隆起線による渦巻文を中心とした帯状文が展開し、胴部に縄文または撚糸文を地文として、その上に隆起線や波状沈線の懸垂文を配しています。E 2 式は深鉢土器で口辺の内彎曲がゆるやかになり、渦巻文が簡略化され、胴腹の同文様は平行線化します。E 3 式は微隆起線文と磨消縄文の複合的発達が著しくなります。E 4 式は器面全体に M 字・U 字・V 字のいずれかの無文帯の間に縄文が配されています。

**「加曽利 B 式」土器** 縄文時代後期中頃の土器。精製の土器は各種の鉢、台付の鉢、注口土器などがあり、沈線と磨消縄文の配合による施文がつけられています。粗製土器は深鉢が多く、口縁と胴部に凸凹文を持つ隆起線をめぐらし、縄文を地文としてその上に斜線文や格子目文を加えています。本式は I～Ⅲ 式に細分されています。

**貝 類**

水の性質	貝の種類や名前（主なもの）	
海水（濃い塩水）	砂浜・干潟	2 枚貝：ハマグリ・アサリ・オキアサリ・サルボウ・ハイガイ・オオノガイ・シオフキ・マテガイなど 巻 貝：イボキサゴ・アカニシなど
	磯	2 枚貝：マガキなど
汽水（薄い塩水）	2 枚貝：ヤマトシジミなど 巻貝：ウミニナなど	
淡水（湖沼・川）	巻貝：カワニナなど	

加曽利貝塚から出土する貝のほとんどは濃い海水の干潟に生息する貝で、東京湾に採りに行ったことが分かります。2 枚貝ではハマグリ・アサリ・シオフキの 3 種が加曽利貝塚の主要種です。小型の巻貝であるイボキサゴは貝塚を構成する貝類の量において、加曽利南貝塚では 80% を超えています。また、北貝塚の貝層断面を見ると、イボキサゴの純貝層と破碎貝層が交互に幾度も堆積を繰り返しています。1 回の堆積量はほぼ同量に見えます。

**魚 骨** 南貝塚から出土した魚骨は約 3 万点を超えます。うち種類が確認できたものは

2618 点で、338 点はクロダイ属が占めています。次いでスズキ属、コチ科、ボラ科が判明しましたが数は多くはありません。また、クロダイ属の前上顎骨と左右の歯骨について約 1000 点を計測して魚の大きさを推定してみると、最大全長は 55cm で 37~40 cm サイズの魚が最も多くみられました。

**獣骨** 南貝塚から出土した中型の獣骨は 8 千点を超えます。うち種や部位が特定できたものは 2259 点です。その内訳はニホンシカ 1175 点、ニホンイノシシ 1084 点などでした。

### 大型貝塚を伴う遺跡

千葉市内の縄文遺跡のうち、大型貝塚を伴う遺跡は縄文時代中期に急速に数を増し、後期に最盛期を迎えて晩期には消滅します。この種の遺跡は存続期間も長期にわたるほか、一般日常的な生産用・生活用の遺物・遺構の他に、ここにのみ土偶・石棒・石剣・装身具類などの特殊遺物や、人骨埋葬・家犬骨埋葬・柄鏡形住居、大型貝塚、巨大竪穴などの特殊遺構が集中して残っています。なお縄文遺跡は次の 4 種類に分類できます。①大型貝塚を伴う遺跡(千葉市での比率 3.7%、以下同様)、縄文時代中期に急速に発展し後期に隆盛を極め晩期に急激に消滅します。②貝塚を伴わない集落(72%)、縄文時代早期から晩期まで存続します。③小型貝塚を伴う集落(10.5%)、縄文時代早期から晩期まで存続します。④集落を伴わない貝塚(0.2%)、縄文時代前期から後期にかけて存続します。

### 大型貝塚を伴う遺跡の出土物・遺構

**土偶** 縄文時代の精神的な遺物の代表は土偶といえます。土偶は女性を意識して造形されていることは間違いありませんが、具体的な女性を像にしたものではなく、神をイメージした像として制作されたものと考えられます。千葉県では縄文時代早期前・中頃にかけて土偶の中心地になり、中期は数が減り、後期から晩期末まで再び増加します。土偶の多くはバラバラの状態で見られ原形に復元できませんが、加曾利南貝塚出土の山形土偶は、背中から打ち割ってそのまま廃棄したため、かなり復元できた希少な例です。

**石棒・石剣** 千葉県では石棒の太型は縄文時代中期末から後期中頃までの、細型石棒と石剣は後期中頃以降の遺物です。太型石棒は竪穴住居跡、細型石棒と石剣は竪穴建物や竪穴住居跡からの出土が稀にあります。室内での祭祀行為に利用されていたことをうかがわせます。

**装身具** 髪飾、耳飾、首飾、腕飾などは全て女性が身に着けたと思われます。男性の装身具は食肉獣の骨や牙に穴をあけて、紐に通してぶら下げる腰飾りのみです。

**大型建物(竪穴住居)** 北貝塚の東側斜面では長径 19m、短径 16m(長径 19.4m、短径 14.5m 余りとも)余りの大型建物が発掘されています。同心円状に 3 列の柱穴が巡り、炉跡が 3 か所以上あるのに生活用具の出土がなく、加曾利 B 式の台付異形土器 3 点、山形土偶片、石棒、ヒスイ製小玉などの特殊遺物が出土しています。そのため、この建物は祭祀的な性格を帯びた遺構と考えられます。

## 加曽利縄文人の祭祀儀礼など

縄文人骨は大多数が貝塚から発見されています。これは縄文人が貝塚をゴミ捨て場とみなしていない証左になります。加曽利南貝塚 11 区の環状貝塚の内側縁辺部では、縄文時代後期後半から晩期前半の遺物包含層から、土偶・石棒・石剣・土版など特殊遺物の破片の他に、土製耳飾・ヒスイ製勾玉などの装身具が多く出土しています。ここでは他に土器・石鏃・削器・打製石斧・磨製石斧・石皿・磨石・凹石・砥石などの生活用具も多数発見されています。特殊遺物と生活用具の出土状況に区別されていた状況はないため、道具の使用目的に関わらず対等な扱いをされて遺棄されたと考えられます。これは役割を終えた道具に対する感謝、生命を失った全ての物に対する霊の送りがあったと考える必要があります。すなわちアイヌが生活に不可欠な動植物や器具などの霊を、丁重に神の国に「物送り」する送りの儀式であるイオマンテと類似の思想が縄文時代にあると考えられます。

**縄文人の埋葬** 縄文時代中期頃の埋葬人骨はその多くが仰臥屈葬です。この頃の特異な埋葬例として竪穴住居の床面から複数の人骨の出土する例が、加曽利貝塚のほかに複数の遺跡で確認されています。加曽利北貝塚の 29 号住居址内では 4 体の人骨が出土しました。この人骨は関東ローム層を掘り込んだ床面直上にあって、その上を厚い焼土と貝層が覆っていました。

**縄文人の婚姻** 加曽利貝塚・姥山貝塚（市川市）など、縄文時代中期の竪穴住居跡内で発見された人骨を検討した結果、一夫多妻婚・一妻多夫婚が一夫一妻婚と並んで行われていた可能性が否定できないという結論が出ています。

## 加曽利縄文人の食性

**森の幸** 縄文人は海の幸の他に森の恵みを利用していました。縄文時代は草創期を除くと関東平野の大部分は暖温帯落葉広葉樹林であったといえます。森の恵みの中で縄文人にとって重要な蛋白源はイノシシ・シカを始めとする動物でした。加曽利貝塚ではイノシシ・ニホンジカの骨が多数出土しています。これらの動物は一度捕獲すれば、かなりの食料になる他、毛皮や骨を利用したためです。シカの骨は釣り針やハンマーになり、イノシシの牙は腕輪やペンダントなどの装飾品に、また矢じりとして利用されました。

縄文人の主食は種実類や根茎類であると考えられています。木の実には秋にしか採れないので、冬の食料の欠乏期は貯蔵という方法をとって解決しました。加曽利貝塚ではクリの入った土坑が発見されています。これは木の実を貯蔵するため、地中に穴を掘って作った貯蔵穴という自然の冷蔵庫です。

## 縄文時代の基礎データ

### 縄文時代の時期区分とその年代値

①時期区分	②年代値	山内清男	小林達雄
③草創期	13000~10000	出現期土器群・ <b>燃糸文土器群</b>	出現期土器群

早 期	10000～6000	沈線文土器群	燃糸文土器群・沈線文土器群
前 期	6000～5000		
中 期	5000～4000		
後 期	4000～3000		
晩 期	3000～2300		

①縄文時代の時期区分は研究者の多くが上記の山内清男、あるいは小林達雄の案によっています。

②年代値は“放射性炭素年代測定法”で測定した測定値を、大まかな目安に振り分けた概算値です（測定値を概算値でくくった一般的な年代置です）。

②-2:年代値（概算値）は、草創期の場合 13000～10000 年前を示しています。

③草創期の時期区分には、現在燃糸文系土器群を含める山内清男などの区分と、燃糸文系土器群を含めない小林達雄などの区分の 2 通りの分け方があります。

**千葉県に貝塚が多い理由** 貝塚はほぼ全国に分布しますが、特に東京湾と霞ヶ浦を中心とした関東地方に集中しています。13000～11500 年前に氷河期最後の“寒の戻り”が終わると後氷期（約 1 万年前～現代）となり、地球の温暖化が始まり温暖化で海進現象が起きて海面が上昇しました。現在東京湾には大きな海進を示す堆積層が 2 層にわたり確認されています。下層が七号地層、上層が有楽町層で前者を「七号地海進」、後者を「縄文海進」と呼んでいます。縄文海進の最盛期である縄文時代早期後半から前期前半は、海面が現在より 3～4m 高くなって海水が関東平野の奥まで侵入し、栃木県の藤岡貝塚（前期）が形成されています（また現在の利根川の流れに沿って銚子の河口から霞ヶ浦・北浦・印旛沼・手賀沼を含む大きな古鬼怒湾を形成していました）。海進で運ばれた砂で東京湾や外海には入り江や浅瀬・干潟が形成され、貝や海藻が繁茂しました。また温暖化で北上した黒潮が豊かな魚類を運んできました。こうして千葉県は全国でも有数の貝塚地帯となったのです。

縄文時代中期から後期にかけての大規模な貝塚の形成要因は、物々交換用の干し貝づくりのためという考えもありますが確定していません。中期から後期の代表的な貝塚として加曽利貝塚がありますが、形成要因は日常的な貝採集の結果が基本であったという以上の結論は導き出せていません。

**石 材** 加曽利貝塚が位置する下総台地は、関東平野というかつての盆状の海底が陸化した平野の中心に位置しているため、石を採取することはできません。しかし縄文時代は“新石器時代”で堅い石材が生活・生産の必需品です。加曽利貝塚出土の石器の場合、利根川水系の榛名・赤城、荒川水系の秩父、伊豆・箱根の天城、姫川などが石材原産地であることが判明し、生産・生活・祭祀などの用途に合わせて各種の石材が用いられています。千葉県産の岩石は南部の丘陵部に第三紀の堆積岩などが分布していますが、加曽利貝塚出土の石器の場合、硬度に問題がある第三紀の砂岩を除くとほとんど利用されていません。

**物々交換** 石器石材の乏しい千葉県では、貝輪、玉類、獣骨を用いた装飾品、魚の干物、干し貝、塩蔵品などの特産物と石器石材を交換しました。交換は当時確立していた陸路・海路を使って運搬したものと思われます。

## 加曽利貝塚 研究のあゆみ

**明治 20 年 (1887)** 東京の考古学者上田英吉は、「下総国千葉郡介嘘記」(『東京人類学会雑誌』) で加曽利貝塚を紹介しました。

**明治 40 年 (1907)** 東京人類学会が“遠足会”で加曽利貝塚の規模を調べ、「本邦第一の貝塚」としています。

**大正 11 年 (1922)** 大山柏(軍人、考古学者、大山巖の次男)が地形測量を実施し、貝塚を A・B・C・D の 4 地点に分けました。また、貝塚が 8 字形であることが図で示されました。

**大正 13 年 (1924)** 東京帝国大学人類学教室が B・D 地点を発掘し、新たに設定した E 地点も発掘しました。また、B 地点と E 地点の層位的発掘調査で新しいタイプの土器が出土し、のちに「加曽利 B 式」「加曽利 E 式」と呼ぶ土器形式が設定され、関東地方における縄文土器編年の標準遺跡になりました。

**昭和 12 年 (1937)** 山内清男(考古学者)によって縄文土器の編年がまとめられ、加曽利 E 式は縄文時代中期の後半、加曽利 B 式は後期中頃に位置づけられました。

**昭和 33 年 (1958)** 明治大学考古学研究室が発掘と地形測量を行い、加曽利 E 式が I 式と II 式に分けられることを確認しました。

**昭和 39~40 年 (1964~1965)** 日本考古学協会が南貝塚を発掘調査しました。

**昭和 40~43 年 (1965~1968)** 加曽利貝塚調査団が北貝塚を発掘調査しました。

(昭和 39~40 年の調査で、加曽利北貝塚はドーナツ状に盛り上がった環状で直径は約 130 m。南貝塚は 3 つの半月状の貝層が連なって馬蹄形を形成し長径は約 170m。2 つの貝塚が 8 時型に連結していることが判明しています(『加曽利貝塚 20 年の歩み』武田宗久執筆(昭和 62 年 3 月))。このデータは「加曽利貝塚博物館パンフレット」(平成 28 年 7 月)、『加曽利貝塚』村田六郎太著(平成 25 年 5 月)が使用しています。また『国史大辞典』3 の杉原荘介執筆文(昭和 58 年 2 月)には“北貝塚は長径 160m・短径 145m。南貝塚は長径 185m・短径 155m、とあり、加曽利貝塚博物館 HP には北貝塚は直径 140m でドーナツ形。南貝塚は長径約 190m で馬蹄形とあります)

**昭和 41 年 (1966)** 加曽利貝塚博物館が開館しました。

### 【引用・参考文献】

\* 本文は下記の刊行物の研究成果をまとめたものです。

『加曽利貝塚』村田六郎太著 同成者 平成 25 年

『千葉県の歴史 通史編 原始古代 I』堀越正行他執筆部分 (財)千葉県史料研究財団 平成 19 年

『加曽利貝塚 20 年の歩み』武田宗久・後藤和民執筆部分 千葉市加曽利貝塚博物館 昭和 62 年

『国史大辞典』3 杉原荘介・西村正衛執筆部分 吉川弘文館 昭和 58 年

加曽利貝塚博物館 HP

